

国選択無形民俗文化財

ケベス祭



10月14日祭り公開日
ケベス祭（櫛来社境内での神事）の流れ

始まり

午後7時頃
櫛来社拝殿で宵宮祭りの神事が始まる。



面を着け、神職が背中に指で「勝」の字をなぞる。背中を一叩きするとケベス（神）がのりうつる。

ケベスに装束を着せる神職。

クライマックス



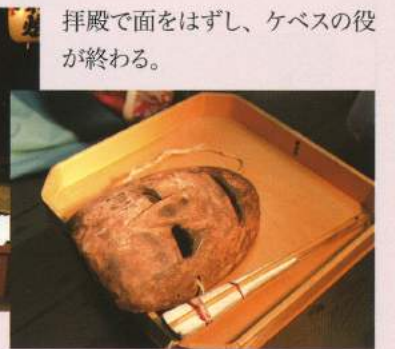
当場が火の粉を振りまいて参拝者たちに浴びせる。

火に飛び込むケベス。

ネンガク（練楽）の列に入り、火に突入する隙をうかがうケベス。

火に突進するケベスを当場が順番にさえぎり、押し戻す。

終わり



拝殿で面をはずし、ケベスの役が終わる。

神社の西門、御供所前、拝殿前で来年の五穀の豊凶を占う。

〈参考文献〉
段士達雄 2011 「北部九州の宮座 シガン・ジンガを中心として」
『共同研究 宮座と社会：その歴史と構造』八木透・上野和男 編 国立歴史民俗博物館

案内図



お問い合わせ
国東市伝統文化活性化実行委員会
事務局：国東市教育委員会 文化財課

〒873-0504 大分県国東市国東町安国寺 1639-2
国東市歴史体験学習館内
TEL：0978-72-2677
FAX：0978-72-2505

祭りの参拝についての注意

祭りには、学術的な調査や記録以外、一般には公開されていない部分もあります。個人宅や屋内等で行われる非公開の行事には、関係者のみで行われる神聖な神事や住民のプライバシーに関する事柄も含まれています。祭りの伝統やしきたりを尊重し、迷惑をかけることのないようにしましょう。また、神社境内での公開行事では、マナーを守って写真撮影等を行い、祭りの関係者や参拝者に迷惑をかけることのないようにしましょう。

ケベス祭とは

ケベス祭は国東市国見町櫛来(くしく)の櫛来社(岩倉八幡社)の秋の例大祭の宵宮祭り(よいみやまつり)として、毎年新暦10月14日の夜に行われる火祭りです。昔は旧暦9月14日に行われていたのが地元では「九月祭」とも呼ばれていました。

祭りではケベスは白装束に木彫りの仮面という姿で境内に降り立ちます。境内では積み上げられたシダの山に火がつけられ、ケベスは太鼓・笛・鉦(かね)などのネンガク(練楽)の列に入り、肩に担いだ棒(差又)・さすまたを扇子で叩きながら境内を廻ります。一廻りしたところで、ケベスは火に向かって突進します。火を守る当場の男たちは、差又でケベスをネンガクの列に押し戻します。ケベスは再び突進し、また押し戻されます。3度目の突進で火に突入し、燃えるシダの束を差又ではねます。しかしまた当場に押し戻されます。このやりとりが3回繰り返され、通算9回目の突進で火に飛び込むと、今度は当場たちが差又にシダの束を突き刺し、その火の粉を参拝者たちに振りまきます。火の粉を浴びると無病息災になるといわれます。

境内に悲鳴と歓声が響くなか、ケベスは境内の3か所で差又の先につけたワラツト(わらづつみ)を地面に3回叩きつけます。叩きつける音が大きいくほど五穀豊穣になるとされています。すべの火が消えたころ、神職の叩く締めの大鼓の音を合図に火祭りは終わります。

このケベス祭は、平成12年12月25日に国の選択無形民俗文化財に選択されています。



ケベス祭の奉仕者

櫛来社の氏子は櫛来地区を構成する3つの行政区で約220戸あります。その氏子が現在は8つの当場組(とうばぐみ)に分かれ、一年交代でその年の櫛来社の神事に奉仕しています。ケベス祭もその年の当場地区の人々と、神職及び宮付きと呼ばれる代々神事に奉仕する家の人々によって執り行われます。ケベス祭では当場組の中からケベス役をはじめオカヨとトウジ及び各々のスケ(介)の各役(左表参照)を「釣りくじ」によって選ぶしきりがあります。「釣

名称	役割
当場(トウバ)	祭りを担う当番地区。また、その地区で祭りに奉仕する人々。
当場元(トウバモト)	神徳屋を建て、神導様を迎える。
大世話人(おおせわにん)	当場組の統括(当場元を兼ねることが多い)
オカヨ	神導様に仕え、供物を取り仕切る。
オカヨのスケ	オカヨの補助
トウジ(杜氏)	神徳屋で甘酒を仕込む
トウジのスケ	トウジの補助
ケベス	ケベス役

りくじ」とは、候補者の名前が書かれた紙を、神職が神に結びつけた麻ひもでなぞり、その先端にくっつけた紙を釣り上げるといふものです。

神導様(シンドウサマ)



神導様は神幸にあたり道案内をする神とされています。普段は櫛来社の御供所(くしくしよ)への供え物を準備する場所の神棚に祀られています。10月9日から祭り当日までの6日間、当場元の家の軒下に作られた「神徳屋(かむほや)」に祀られます。

神徳屋(カムホヤ)



カヤを組み合わせた一間四方の小屋で当場元の家の軒下に作られます。中に神棚を作り、棚の上には神導様を祀り、その下に甘酒の甕や供え物の櫃などを据えます。



祭りまでの準備

ケベス祭は準備の時から、神の見守る中で古くからの決まりごとを厳格に守ってすすめられます。まず神社の清掃が行われ、当場組総出で山から神徳屋に使われるカヤや、境内で燃やすシダを刈り集めたり、注連縄(しめなわ)の用意をします。そして10月7日までにはまず当番元と大世話人を決め、続いて「釣りくじ」でオカヨ・トウジや各々のスケ(補佐)が決められます。

10月8日《非公開》

当場元の家の軒下に神徳屋を作ります。

10月9日「宮下り(みやくだり)」《非公開》

神導様が櫛来社から当場元の神徳屋へ行幸する日です。朝、当場組と神職・宮付きの人々がオカヨを先頭に行列を組み、神導様を神徳屋に祀ります。オカヨは14日まで毎朝海水に浸かって心身を清め、神導様に供え物をします。またトウジは甕に甘酒を仕込み、神徳屋に供え、発酵を促すため毎朝かき混ぜます。

そしてこの日から祭りが終わるまで、当場組全員が精進潔斎(しょうじんけつさい)・酒や肉食などをつつしみ、心身を清める)の生活に入ります。また、当場以外の人とは一切火を交えてはならないため、他の地区で作られた飲食物を口にしたり他の地区の人に飲食物を作ることができません。学校や職場には家で作った弁当・お茶を持参することになります。

10月13日《非公開》

当場の男性全員で海でシオカキ(潮掻き)をして身を清め、当場元で供え物の鏡餅や御縄餅(おなわもち)・神がお土産を結んで帰るといわれる縄を結んだ形に作った餅)や御沓型餅(おくつがたもち)・神が帰る際に履くといわれる沓底を型どった餅)をつきます。当場は全員白装束姿で、餅にケガレがつかないように口に「カミシバ(神の葉)」をくわえ、一言も声を発してはいけません。神職と大世話人だけが言葉で指示を出すことができます。餅つきが終わると、ケベスの「釣りくじ」が行われ、ケベス役が決定します。



御縄餅



御沓型餅

ケベス祭

10月14日(祭当日)《公開日》

午後2時頃 「宮上せ(みやのぼせ)」神導様が櫛来社へ還幸するための行列が当場元を出発します。オカヨを先頭に小旗(コバタ)・太鼓・鉦・神導様と続き、お供えの甘酒や餅も櫛来社へ運ばれます。



午後6時頃

「潮掻き(シオカキ)」当場の男性が海水につかり身を清めます。

